

# R・B・K EYE

VOL. 168

2015. AUGUST

編集責任 飯嶋 薫

## 1. アパレル中間ゾーン低迷と「JQ」

猛暑日続きの2015年夏。ファッション業界天気図は、全体的には「薄日」か「晴れ」マークがついていますが、唯一「曇り」もしくは「小雨」か「雨」なのが、一大市場である婦人服の中間ゾーンであることは何を物語っているのでしょうか。つくり手のアパレル企業に魅力的な商品を企画する力が失せてしまったのか、消費者に対面する商業施設側も、主力の百貨店は長きにわたって売り場をアパレル企業に依存してきて、その結果、低迷脱出の手立てを講じることができないでいるのでしょうか。

アパレル製品の中間ゾーンは、言わば日本ファッション業界のお家芸ともされる主戦場です。しかし、このゾーンの消費が振るわないことは、ワールドのリストラ（今期中に全店の15・0%に当たる400-500売り場の閉鎖と希望退職募集）に代表されるように深刻な状況にあります。他のアパレル大手の経営も厳しさを増していると伝えられています。

中間ゾーン不振の理由としては、そもそもファッショナパレルの消費は、飲食や旅行、スマホなどのタブレットに押され気味であることに加え、ファッション消費でもラグジュアリーブランドと低価格高品質商品との競争に負けている、との見方があげられています。中間ゾーン不振では、こんなところにも影響が出ているようです。先月下旬に東京ビッグサイトで開かれたアパレルの展示商談会「JFW—IFF」（JFWインターナショナル・ファッション・フェア）は、出展企業の減少傾向から抜け出せず、活気に乏しいものでした。出展者、来場者ともその理由のひとつに「中間ゾーン不振」を指摘していました。出展する余裕が無い、というわけです。

どうしたら良いのでしょうか。起死回生の妙案は浮かびませんが、解答のひとつは日本ファッション産業協会（JFIC、三宅正彦会長）が取り組んでいる、純国産アパレル商品の認証制度である「J∞QUALITY」（JQ）を活用して、安心・安全で、かつ、ファッショナブルで高品質・適正価格な「ジャパン・ファッション」をアパレル企業と商業施設、特に百貨店が連携して外国人旅行者を含めた消費者にアピールすることではないでしょうか。

消費者が「欲しい」と思い、実際、購入するアパレル製品は、安心・安全で、かつ気持が良くて（高機能）、着てみたい（現代的なデザイン）モノでしょう。その商品に「物語」を感じられれば、より支持されるでしょう。品質の確かさは言うまでもありません。まさしく「JQ」です。日本のファッション産業を牽引してきたアパレル企業と百貨店の奮起をいまこそ求めたいと思います。

## 2. 本屋受難の時代

### 一嶋田洋書店（青山）完全閉店

海外文化の情報発信基地として全国にファンがいた青山の一嶋田洋書店が2015年9月23日に完全閉店することに決まりました。50年に亘り、建築、自動車、インテリア、ファッション、デザイン、音楽等々のビジュアル書を欧米アジアから直輸入し、その圧倒的な品ぞろえは多くの、その道のプロフェッショナルに愛され、日本文化、文明の発展に貢献してきました。その一嶋田洋書店が卸しも含めて営業廃止することには時代の流れとはいえ、愕然とする思いにさせられました。ネットで何でも探せる時代になりました。欲しい本が

あればアマゾンに発注すれば済む時代です。かつては、セゾン文化を体現する存在として一世を風靡した「西武ブックセンター」現「リブロ」の池袋店と青山店もこの夏に閉店しました。一方、カフェ付きや家電コラボで話題の蔦谷書店や大型化し、子供の遊び場なども併設した有隣堂等、話題の書店もありますが話題性はあっても営業的には苦戦の業界であることには変わりありません。紙の雑誌、書籍のダウントレンドは底なし沼です。そんな中、今年の芥川賞に選ばれた又吉直樹の「火花」が209万部を超えたことは出版業界にとってビッグサプライズでした。一人でも多くの人が本屋に足を運ぶきっかけになることを期待します。また、規模は小さいですがオーナーの個性、コンセプトで品ぞろえし、その場を客同士のたまり場にして人気の池袋「天狼院書店」のような、文化・情報発信の基地としての本屋は次世代に向け嬉しい存在であります。アナログの灯りは消えることはありません。

## ＜レストランレポート＞

### 3. 美しい食卓「La Bonne Table」

コレド室町2にオープンしたフレンチレストラン「La Bonne Table」。

「美しい食卓」という意味のフランス語。食で賑わうコレドですが、こちらのレストランは名店「ルフェルヴェソヌス」の生江史伸氏がプロデュースしたカジュアルバージョンのレストラン。カジュアルと言っても食材へのこだわりはそのままで、もっと気楽に楽しんで頂こうという試み。ガラス張りのオープンキッチン、高い天井、ゆったりとしたテーブルの配置、リラックスして食事を楽しめます。ディナーはコース料理のみ。どのお皿も食材の美味しさを充分に生かした、どちらかというとシンプルな味付けですが、そこに遊び心のある演出が隠されています。ディナーコースの2皿目として登場するのが、得体のしれないパンパンに膨らんだ袋。袋を開けると桜チップの燻製の煙と匂いがふわっと漂い、中からキタアカリのフレンチフライが出てきます。2度揚げしているので外側はカリカリ、中はしっとり、癖になる味です。お肉もお魚もどちらも甲乙つけがたい美味しさです。お酒もバランスの良いセレクションです。お酒が苦手な人には、お料理ごとにお茶や、果物、ハーブなどを組み合わせた最適なジュースをペアリングするマリアージュコースを用意。こんな所も気が利いています。サービスも気持ちが良いので、ビジネスでもプライベートでもどちらにもお勧めなレストランです。

お値段はコースでディナー￥6800、ランチ￥3600。要予約です。

東京都中央区日本橋室町2-3-1 コレド室町2 1F TEL:03-3277-6055

営業時間：ランチ 11:30～13:30 (L/O)

ディナー 17:30～21:30 (L/O)

不定休

<http://www.labonnetable.jp/>



/R・B・K おもてなし調査隊がいく／

# 今月のPATROL

2か月前から予約した、  
庭園ビアガーデンのおもてなし



SHOP DATA>>> Q.E.D. CLUB

住所：東京都目黒区中目黒1-1-29

## おもてなし評価

総合

100点



挨拶



笑顔



パーソナルな対応



再来店したいか



一流ホテルのおもてなしをしながら、  
庭園を走るスタッフ！素敵です！！ 調査員A.M.

恵比寿の元ハンガリー大使公邸を改装した一軒家レストラン「Q.E.D. CLUB」。素敵な庭園を愛でながら、なんとも贅沢なビアガーデン。ゆったりとしたホテルの様なおもてなしで、忙しいフリードリンクのビアガーデンサービスは出来るのか？ワクワク感満載でいざ入店！！

Point!

R・B・K 調査隊長よりヒトコト！

今やビアガーデンは大人気。特に特色ある都市型ビアガーデンは予約困難で、様々なコンセプトを設定した店舗環境とメニュー開発には進化を感じるが、接客に関しては旧態依然としているのが現状だろう。来夏には、気付き・目配りができるビアガーデンが増えることに期待したい。



[Q.E.D. CLUB]

VOL.25

世界のトップレベルを誇る日本の接客やサービス。そのリアルな現場を年間1300店以上見ている調査員がパトロール！時代が変化しても引継いでいきたい「おもてなし」を、調査結果と共に発信していきます。



チェックインはまるでホテルの受付  
スタッフ同士の連携はバツグン！！

リゾートホテルを思わせる門を入り、建物に近づくとスタッフ3名が丁寧に出迎えた。名前を伝えると、すぐにクローケスタッフがカウンターから出て来て手荷物お預かりの確認があった。案内スタッフについて歩き出すと、有機野菜やスイーツなどが展示されたコーナーがあり、気さくなスタッフから有機野菜やシェフについての説明を受けていると、別のスタッフから試食のお勧めがあった。限定品の人気スフレを今のうちに取り置き出来るか聞いてみた。すると、クローケスタッフが現れ、「お会計はお帰りの際に。商品はクローケでお預ります」と説明があった。スタッフ同士の連携はバツグンだ！



フリードリンクは全てテーブル席で注文  
目配りの行き届いたサービスに大満足！

案内スタッフに続いて、こぢんまりとした庭園に出ると、ガーデンパーティーのような設え。その先に広がる芝生や丘の向こうのお茶室を眺められる贅沢なお席に案内された。こちらでは、お料理はビュッフェ式、ドリンクはフリードリンクでテーブル席にて注文、別途オプションのお料理やドリンクもあった。こちらがお料理を取って席に戻ったタイミングでファーストドリンクが提供され、初めから目配りが良いことに感心した。その後のさりげない巡回で空いたグラスやお皿は素早く片づけられ、ドリンク追加も絶妙なタイミングで提供された。



楽しそうなスタッフの笑顔に  
猛暑の庭園もさわやかな空間に！

お客様の9割が女性だったが、どの席でもよく食べ、よく飲んでいたので、スタッフはてんてこまいかと思えば、そういう訳でもなく、芝生で撮影するお客様と楽しそうにシャッターを押したり、虫よけのハーブスプレーを各テーブルにお勧めして回ったり。何よりスタッフが楽しそうに働く姿がとても印象的だった。丘の下にある和食処から、和服姿の仲居さんが何度も丘を駆け上って来る姿を見かけたが、汗を拭きながらも笑顔を絶やさず、きびきびと一気に駆け上がっていた。キンキンに冷えたビールとさわやかなスタッフの笑顔のお蔭で猛暑も忘れ、楽しく心地よいとてもゴージャスな夜だった。